
悪魔の妹ウル

アバドン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔の妹ウル

【Zコード】

N6238Y

【作者名】

アバドン

【あらすじ】

2011年の現代、高校1年生の悩める少女がいた。少女は勉強が好き、運動神経もよいことから、まわりの人間に期待され、尊敬されている。しかし、家に帰れば両親は仕事でおらず、いつもひとりでの夜食。そんな生活を送っていると、ストレスも溜まり、自殺を考えるようになる。

そんなある日、クラスメイトから『悪魔の館』という都市伝説を聞く。その悪魔は妹を求めており、思春期の自殺などを考えている少女だけが悪魔に会える。少女はその日の帰り、悪魔と出会つて

しまい、妹になる事を決める。それが今以上に過酷な人生の始まりになるとも知らずに。

登場人物紹介（前書き）

それほど長い旅ではなかったです。アバドンが帰つてきました。待つていい人もいるでしょうが、小説の腕を磨いてきたつもりです。ミソロギアよりもたぶん面白いはずです。誤字脱字も少ないはずです。

登場人物紹介

名前：ティアマテウス（通称ティア）

種族：悪魔

年齢：24歳

身長：180cm

体重：75kg

武器：バルムンク

髪の色：黒色

瞳の色：右は黄色 左は青色（悪魔化すると両方赤色になる）

この物語の主人公で、性格の悪い悪魔族の生き残り。父の遺してくれた『バルムンク』と共に、父の仇を討つべく力を蓄えている。悪魔は人間形態と悪魔形態に別れている。人間形態では、姿は人間そのものだが、悪魔形態では形は人間でも、姿は化け物のようになるのだ。

悪魔である父・ティアヴォロスと母・ルシアの間に生まれ、兄・ヴェテルギウスと妹がいた。父と母と妹は戦いで命を落とし、兄は行方不明。

名前：ウルティミウス（通称ウル）

種族：悪魔

年齢：16歳

身長：160cm

体重：50kg

武器：金剛宝剣

髪の色：青色

瞳の色：水色

この物語のヒロイン。紺色の制服を着ていて、天道高校に通う勉強ができて運動神経も抜群といつ。高校ではアイドル的な存在で、テレビの取材も来るくらいだ。現実から逃げたくて、ティアの妹となり、悪魔として生きる道を決めた。

ティアの真の目的を知らず、ただ兄となつたティアについて行くだけの日々を送るようになつた。

その他の主な登場人物

名前	十六夜 零時
種族	死神
年齢	21歳
身長	175cm
体重	70kg
武器	幻魔氷剣
髪の色	銀色
瞳の色	青色

ティアを狙う死神の一族。悪魔も人間も嫌いだが、理由も無く殺すということはしない。植物や小動物を愛している。

10年前の戦いの生き残り。零時は、ティアに関係する人物を戦いで殺し、手柄を立てている。

名前	秋月 紅葉
種族	死神

年齢：14歳
身長：155cm
体重：45kg
武器：炎龍刀
髪の色：赤色
瞳の色：橙色

零時の部下で、命ある者から命を奪うのが大好きな少女。可愛い外見とは裏腹に、殺戮を繰り返している。

10年前の戦いには参加していない。

名前：浅沼紫苑
種族：死神
年齢：19歳
身長：170cm
体重：55kg
武器：雷龍刀
髪の色：紫色
瞳の色：緑色

紅葉と同じく零時の部下。紅葉とは違い、理由も無く他人を傷つけたりはしない。零時の命令は絶対と思っている。

10年前の戦いには参加していない。

名前：ヴェテルギウス（通称、ヴェル）
種族：悪魔

年齢：24歳
身長：180cm
体重：75kg
武器：アロンダイト
髪の色：黒色
瞳の色：赤色

ティアの双子の兄。訳あって、孤立している。死神にもティアにも、生きている事は確認されてはいない。

名前：ラ・モール・ファントム（通称ラ・モール）
種族：死神
年齢：51歳
身長：170cm
体重：65kg
武器：煉獄の魔剣れんごくまけん
髪の色：白色
瞳の色：紫色

ティアの父を殺した死神一族の王。ティアがいつか自分と同等の力を持つのを待っている。かなりの力を持つており、その力は、その気になれば町1つ破壊できるほどの力を持っている。

強い者との戦闘を好むだけあって、今のティアには敵として認識していない。故にティアと戦う気は今のところ全くない。

種名：前族：
年齢：
身長：
体重：

髪の色：

瞳の色：

それと、服装や、口調などを書いてくれるとありがたいです。

主人公を圧倒したり、世界觀を崩すようなオリキャラは採用しません。

種族は何でもいいです。人間でも天使でもナメック星人でもいいです。

登場人物紹介（後書き）

オリキヤラを募集しています。兄のような文章力はありませんが、これから良くしていきます。

序章（前書き）

いつも、アバランです。旅から早くも帰つてきました。

2001年12月31日。ここはフランスの都パリ。凱旋門の屋上で、2人の人物が幾多もの戦いを勝ち残り、最後の決着をしようとしている。1人は白髪の短髪で、ボロボロの黒いライダースーツに、赤いコートを着ており、右手には青色に輝く剣を持っている。そしてもう一人は、赤黒い鎧を纏い、その胸と膝の部分には、ギヨロギヨロ辺りを見回す血のように不気味な赤色をした目玉がついている。そして右手には、緑色の不気味な邪氣を放つ巨大な大剣を持っている。

「今……長きに亘り……続けられてきたこの戦いに、決着をつける時が……ぶは！」

赤いコートを着た男が口を開いたが、最後まで喋る前に血反吐を吐き、その場に座り込んでしまった。

「貴様ら悪魔もこれで終わりだ。この戦いは我が死神一族の勝利に終わるようだ！」

鎧の男が、その大剣を構えてゆっくりコートの男に忍び寄つてくる。

「くつ……こんな所で、負ける……わけには……！」

全身に力を入れ立ち上がるが、かなりの出血に疲労が重なり目眩がして、うまく立ち上がる事ができない。

「諦めるのだ。貴様ら悪魔一族はもう……」

一步、また一步と近づいてくる。そしてコートの男まで、あと数歩まで迫つて来たそのとき。

「悪魔は……まだ終わらぬ！ ハアア！」
「何を！？」

コートの男は最後の力を振り絞り、その手に持つていた剣を凱旋門から投げ落とした。

「息子よ！……その剣を持ち、いつか悪魔一族を蘇らせろ！……これ

は命令だ！ 放棄することは絶対に許さん！！」

投げ飛された剣は、凱旋門の下のコンクリートに突き刺さった。

「まさか、自らの命と同等に扱ってきたあの剣を、息子に託すとは

……死を覚悟したのだな……ディアヴォロスよ」

「あ……私は駄目でも、息子がやってくれるぞ」

「フン。まあよい。その息子だけは生かしとしてやる」

鎧の男はその大剣を高々と振り上げ、全身の力を込めて振り下ろした。

「いつか思い知るだろ？……ラ・モールよ……」

そしてコートの男の身体は縦に斬り裂かれ、1つだったはずの身体が2つになつた。悲鳴を上げる暇もなく、コートの男はこの世を去つた。

「フ……フフ……フハハハハハハハハ！」

鎧の男は戦いに勝利したことで喜びに満ち溢れていた。その高笑いと同時に、パリの都は、新しい年を迎えた。

それと同じ頃、凱旋門の下では、1人の少年が落ちてきた剣を手に取り口を開いた。

「父上の命令……確かに聞きました。命令を達成するまで、自分はこの剣と共に、この先の人生を歩んでいきます」

そう言つと、少年は背中に剣を装着し、凱旋門に背を向けその場から立ち去つた。

序章（後書き）

オリキヤラ募集中です。どんどん評価してください。

第1夜「闇の世界」（前書き）

第1夜を投稿します。

第1夜「闇の世界」

2011年10月1日。東京都渋谷区。その町にある天道高校に、1人の少女が通っていた。その少女の名を、クラスメイトや教員は、『神崎 楓』と呼んでいる。楓は今年の8月15日に16歳になつたばかりの高校1年生だ。顔立ちもよく、成績を良いことから、男子だけでなく、女子からも高い評価を受けている。テストでは常に上位にいる。中学の頃は陸上部に所属し、走り高跳びで好成績をこなしていくことから、教師からも期待させている。だが、それがストレスとなる事もよくある。

家庭では、両親は夜遅くまで仕事で帰宅してこないため、夜食は毎日1人だけで食べている。そんな神崎には兄妹もいないので、中学の頃から兄妹……なるべく頼りになるような兄が欲しいと願うようになった。

そんな生活が、いつまで続くのか。別に自殺するしたい苦しいといふわけではない。ただ、期待されることからくるストレス。家の孤独。それが、いつしか耐えられなくなつたときに、ある噂を耳にした。

「ねえ楓！　『悪魔の館』って知ってる！？」

授業後に1年D組の教室で、楓を含めて3人で話しているときに、1人の茶髪のクラスメイトが唐突に話を持ちだしてきた。

「悪魔の館？」

楓は初めて聞くその言葉に、首を傾げる。

「ああ知ってる！　何か悩みを持った思春期の女の子だけがたどり着ける所だよね！」

そしてもう1人の金髪のクラスメイトが興味のある話なのか、飛び跳ねながら答える。

「それって、何かの映画？」

まあ映画のような感じではあるかもしない。

「違うよ楓！『悪魔の館』っていう都市伝説があるの！」

そして茶髪のクラスメイトは、ゆっくりと怖い話でもするかのように話し始めた。

「それはね、ある悩みを持った思春期の女の子が、町をフランフランしていると、いつの間にか知らない場所にたどり着くんだった。そしてその目の前には黒い館があつて、その中に入ると悪魔がいるんだって。そしてその悪魔はその人の過去や悩み事を言い当てるといつかの質問を繰り返した後、最後にこう聞いてくるんだって……」

茶髪のクラスメイトは口を閉じた。

「…………『悪魔の妹になる気はないか』…………って、そして金髪のクラスメイトがその質問をする。

「そしてその質問に『はい』と答えると、その人はその悪魔の妹になつて、闇の世界へ連れて行かれるんだって！」

茶髪のクラスメイトは話を再開する。

「怖い！」

金髪のクラスメイトは震えながら楓の側に寄る。

「何で女の子だけなの？ どうして妹なの？」

「さあ。ただのロリコン悪魔じゃないの？ ぶつちやけ、アタシだつてその都市伝説、そこまで信じないんだよね」

「アタシも。実際に見たつて子は何人もいるみたいだけど、ホントかどうかねえ～」

2人のクラスメイトは、話しを盛り上げるだけ盛り上げて、最後には下げてしまった。結局何が言いたかったのか、楓にはよく分からなかつた。

「ま、楓には悩むようなことなんてないと思うから安心だよね？ じゃね！」

「そうそう。何せ天才少女！ だもんね！ バイバイ！」

最後にそれだけ言つと、2人は教室を出でいった。

（私だつて、悩みの1つや2つくらい……。いつその事、その悪魔

の妹になつちゃおつかな……）

そんな事を思いながら、楓もそろそろ帰宅することにした。

今の季節は衣替えで忙しい。まわりの人々は徐々に長袖の服や長ズボンを履く人が増えてきた。楓の通っている高校でも、今は夏服か冬服のどちらでも着て登校して来てもよい期間の最中だ。楓はまだ夏服のままだ。もう少しだけ寒くなつたら着るつもりでいる。（はあ……また家に帰つたら独りなのよね。お父さんもお母さんも、仕事が忙しいのは分かるけど、それでも少しくらい私と一緒に時間過ごしあつて……）

楓は寂しそうな表情を見せながら、夕方の町を歩いている。はづだつた……。

「…………え？ い、いー……ビー？」

気がつくと、さっきまではまわりに人などいくらでもいたはずなのに、気がつくと、辺りはもうすでに暗闇に包まれており、人の気配など全くしなかつた。

「どういふこと？ これつて……まさか」

『それはね、ある悩みを持った思春期の女の子が、町をフラフラしていると、いつの間にか知らない場所にたどり着くんだつて』

楓はさつと教室で聞いた都市伝説を思い出した。

（まさか……そんな！ こんな事が、本当に起きたなんて…）

楓は一瞬目を疑つたが、確かに自分の田の前には話しの通り、洋風な黒い館が、堂々と聳え建つていた。

「夢よ。夢に決まつてゐる。きっと疲れてるのよ。だからこんな夢を

……」

そして黒い館は、入れと言わんばかりに、まるで意思を持つているかのようにその重そうな鉄の扉が開いた。

「…………」

楓はしばらくどうするか考えたが、帰宅するにしてもどうやってここから戻ればいいのか分からないので、とりあえず尊が本当ならば危険はないはずだと、館の中へとまるで誰かに心を操れているかのように、ほとんど自分の意思とは関係なしに足が動き、館へと入つて行つた。

中は蠅燭アヒンクが数本あるだけあり、その明りだけを頼りに前へと進んで行く。そしてずっと進んで行くと、目の前には黒い机がと黒い椅子があり、黒い衣服を身にまとつた男が椅子に座り、机に足を掛けた座つていた。

「え、えつと……あの……」

「嫌なのだろう?」

「え?」

少々突然の出来事に戸惑つていた楓に向かつて、黒服の男は突然口を動かした。

「まわりに期待されるのが嫌なのだろう? 昔から期待され続け、それがストレスにもなつて疲れ果てている。家に帰れば独りで、構つてくれる家族や、悩みを打ち明ける友人もいない。そんな孤独な人生に、疲れ果てているのだろう?」

黒服の男は、まるで楓の心を読んでいるかのようになつて楓の本心を言ひ当てた。

「……そ、そうなんです。お願いします! 私を……私を助けてください!」

楓は黒服の男に泣きつくようにお願いした。

「……闇は好きか?」

「え?」

「夜は好きか? 黒は好きか?」

突然黒服の男はいくつもの質問をしてきた。

「え、えつと……や、闇より、光の方が好きです。光の方が、『希望』つて感じがしていいです。夜は星や月が綺麗なので、好きな方です。黒より、私は青色が好きです。空が、綺麗な青色をしている

ので」

楓は黒服の突然の質問に、順序よく答えていく。

「……そつか。ならば最後に問おう。………… 悪魔の妹になる気はないか（…………）？」

噂通りの質問をしてきた。これで『はい』と答えれば、その者は悪魔にされ、永遠に闇の世界で生きる事になる。

しかし『はい』と答えてしまえば、この苦しい生活から抜け出せる。どうせ学校では、心から慕う親友もいない。家に戻つたとしても独りぼっちで、そんな生活が続くぐらいなら、いつそのこと……。

「あなたの……妹になります！」

「……フン。では、この契約書にサインを」

そう言つて、黒服の男はA4サイズの紙と、万年筆を楓に差し出した。楓は黙つてその用紙に自分の名前を記入した。

「書きました」

「……『神崎楓』……か。下らん名だな。喰つてやる」

黒服の男はスウッと空氣を吸い込むと、さつき書いた楓の名前が用紙から剥がれ、口の中へと吸い込まれていった。

「契約完了。これでお前は名無しだ。嘘だと思つなら自分の名を言つてみる」

「わ、私の名前は……あれ？」

どういう事だろうか。自分の名前など何よりも先に頭に浮かぶはずなのに、全く浮かんでこない。

「ど、どうして？ 私の名前は……名前は……名前は……」

「お前の名はウル……ウルティミウスだ」

「ウル……ティミウス？」

「やうだ。名を思い出せないのはオレがお前の名を喰つたからだ。もつお前の前の名はこの世には存在しない。もう2度と思ひだす事はないだろう」

そう言いながら黒服の男はあるものを机の下から取り出した。

「それは、何ですか？」

「悪魔の血だ。契約を完了したお前にはまず、悪魔になつても『ひづ』
このとき、悪魔になるという噂は本当だと確信した。そして黒服
の男は、瓶に入った血をグラスに注ぎ、机に置いた。

「飲め、と言つことですか？」

「そうだ」

「…………」

多少のためらいはあつたが、契約してしまったものは仕方がない
ので、香りをかいだから、少しずつ喉に通した。味はこれこそが『
血』というものだと感じさせるように、濃く、不思議と美味だった。

「飲みました」

「これでお前も悪魔の仲間入りだ。これからは遠慮なしにオレの事
は『お兄ちゃん』とでも呼ぶがいい。我が妹ウルティミウスよ」

黒服の男はゆっくりと右手を差し出した

「名前を聞いてもいいですか？」

「ティア……ティアママテウスだ」

「ティアママテウス…………よろしくね、ティアお兄ちゃん」

こうして人間・神崎楓は悪魔・ティアママテウスの妹になった。

第1夜「闇の世界」（後書き）

オリキヤラ募集中です。

第2夜「三種の神器」（前書き）

早くも2話目を投稿します。

この話はほとんどのトライアとウルの会話で物語が進んでいきます。

第2夜「三種の神器」

悪魔の契約書にサインをした神崎楓は、自分の本当の名をティアマテウス（通称ティア）と言う悪魔に喰われ、ウルティミウス（通称ウル）と言う名を与えられた。ティアの妹になつたウルは、多少だが正気に戻り、何故こんな事をしているのかと、ティアに尋ねた。

「何故そんな事を聞く？」

質問を質問で返された。

「何故つて……気になつたから……かな？」

気になる事は聞くのが普通だ。

「まあいい。可愛い妹の問いただ……答えてやろう。何故オレがこんな事をしているのか、何故思春期の女だけなのか」

ティアは、まずこんな事をしている理由を語り出した。

「オレは察しの通り悪魔だ。悪魔一族の生き残りだ」

「生き残り？ じゃあ、お兄ちゃん以外に、もう悪魔はいなの？」

「そうだ。オレたち悪魔はかつて『死神』と言う一族と何代にも亘り戦いを繰り返してきた。その戦いが今から10年前の2001年に幕を閉じた。その最後の大将同士の戦いで、オレの親父は敗れ、戦いは死神の勝利で終わつた」

語り続けているうちに、ティアは少しづつ悲しそうな表情を見せてきた。

「しかし親父は最後の力を振り絞つて、オレに悪魔一族の未来を託してくれた。その証が、この魔剣『バルムンク』だ」

そう言って、ティアは後ろの額縁に飾つてあつた青く美しい光を放つバルムンクと呼ばれる魔剣を手にとり、ウルに見せた。

「バルムンクは圧倒的な魔力を持つ悪魔にしか扱う事はできない。それがオレの親父だけだった。しかし敗れた！ こいつの力を持つても、奴を斃すことはできなかつた！」

次第に怒りが込み上げてきたのか、声に怒りの感情が混ざつてき
た。

「戦いは死神の勝利に終わったが、オレは誓った。必ずや親父の仇
を討つ……と。そのためには戦力がいる。オレ一人ではどう足^{あが}搔い
たつて奴らには勝てない」

「だから、思春期の悩みを持つた女の子たちを？」

「そうだ。悩みを持った若き者なら、何の未練も無く、悪魔となつ
てくれるだろうと思ったからな」

「そうなんだ……でも何で女の子だけなの？　しかも妹なんて。戦
力が欲しいなら、男の子の方が頼りになるんじゃないの？」

それはそうだ。何故わざわざ力の弱い女を味方につけるのか。男
の方が力が強く、絶対的な戦力になるに決まっているではないか。

「理由ならあるぞ。1つは、あいつ（・・・）……いや、今人間界
つて妹ブームだろ？　だから妹がいいかなつて思つてた」

「え？」

あまりに呆気ない理由に、ウルは固まる。

「それと、人間界のテレビなんか見ると、女は母性本能が働いて、
自分の子を命懸けで守つたり、時には浮氣した夫に対して、天使か
ら悪魔に変わつたりするだろ？　だから下手に男を味方につける
より、女の方が多少力は弱いが、勇氣がある。自分だけ助かるよう
な真似をする奴は少ないと思つてな」

確かにそうだ。最近のテレビでは、『怖い女』とか『強い女』な
んてタイトルをつけて、放送しているテレビ局もある。逆に、『怖
い男』『強い男』なんてタイトルのものはほとんどない。強い男は、
いるにはいるのだが、大した悩みを持つていらない奴が多い。ほとん
どの確率で男は変態でヘタレだ。

これはあくまでティアが調べた結果だ。全員がヘタレで変態で、
悩みを持つていらない幸せな奴とは言つていない。

だが、ティアは本当にそんな理由で『妹』を求めているのだろう
か。ウルは何か引っかかっていた。

「そんな奴らよりか、イイ女を味方につけた方がいいだろ？ それに……」

「と、言いかけたが。

「それで、何？」

「いや、何でもない。これでオレの事は大体話したな。ああ、言いつれていたが、もう家に帰つても学校に行つても、誰もお前の事は覚えていないからな」

「はい……え？ それってどういう事！？」

ティアの衝撃的な一言に、ウルは思わず椅子から立ち上がり、机をバンッ、と叩く。

「お前の前の名はオレが喰つちまつたんだ。喰われた名の人物は、もうこの世には存在しねえ。永遠に……死ぬまで闇の世界の住人として生きなければならない」

「そんな……」

「今の生活が嫌でサインしたんだろ？ それなのに、今までの生活が送れないって分かると、契約を破棄するのか？」

「そ、それは……」

ウルの目には少し涙が滲み出ていた。

「安心しろ。別にお前の関係者を殺したわけじゃない。リセットしてただけだ。また関係を築きたければ好きにしろ」

自分の目的のために他人を道具のように扱うこの男は、まさに悪魔だ。しかしそれには、ちゃんとした理由があるからだつた。

「オレはただ妹が欲しくてお前を悪魔にしたわけじゃない。ちゃんとした目的ならある。それがまず、三種の神器を集める事だ」

「テレビ・洗濯機・冷蔵庫……？」

「そつちじやねえ。『八咫鏡・八尺瓊勾玉・天叢雲剣』だ。そんな物集めてどうするんだ？」

間違つた名前を言つたウルに、ティアは訂正した。

「え。違うの？」

当たり前だが違う。今頃そんな物集めてどうしようというのだ。

「で、それはどこにあるの？」

「ああ……それが分らないんだよなあ。昔は悪魔がそれ相応の社を建て、祀つていたのだが、死神がそれを世界中に散らばらせてしまつてな。今ではどこにあるのか分からん」

ティアは机のまわりをウロウロと歩きながら、顎に手をあてて話した。

「世界は広い。虱漬しに探していたんじや、一生が終えてしまつ。そうしたらしいものか……」

「私、お兄ちゃんが探してゐるもかどうか分からぬけど、それらしい物なら知つてるよ」

「ああ……そうだよな。探す方法なんて…………ってマジで！？」

ティアは急に興奮し出し、ウルの肩を掴んで場所を尋ねた。

「う、うちの近くの小さな社があるんだけど、そこに、とても古い鏡が祀られているの」

「それだ……すぐその場所に案内してくれ！」

「あ、う、うん」

ティアとウルはその場所を目指し、人間界に降り立つた。さつきまで2人がいた空間は、ティアが自分の魔力を使って作ったティアだけの空間。つまり突然その場所にたどり着くのは、ティアが招いているからだ。それを興奮のしすぎでウルに説明する事を、ウルもまた、ティアがあまりに興奮しているものだから、聞くのを忘れてしまつた。

人間界に降り立つたティアとウルは、ウルの家の近くにあるといふその小さな社に向かつた。

「ここだよ。この社の中にあるはずだけど……」

ウルは社についている小さな扉を開いた。すると、中には予想通

り鏡らしいものが入っていた。

「あつた！ これだよ！」

「どれどれ……お、確かにハ咫鏡だ！ よくやつたぞウルよ！ これで一つ目の神器……ゲットだぜ！」

何かどこかで聞いたことのある様な言い方をし、右手に持ったハ咫鏡を高々と、月や星たちが輝いている闇色の空へと持ち上げた。

「よかつたねお兄ちゃん！ あれ？ 何かついてるよ？」

「あ？」

鏡についていたそれを見てみると、何やら数字が沢山書かれているA4サイズのコピー用紙を半分に切ったものだった。切り口が雑なので、おそらく手で破いたのだろう。

「……14・5・23・25・15・18・11に往け……？ これどういう事？」

「さあな。『コピー用紙がまだ新しいから、おそらく最近貼られたものだらうが……子供のいたずらか、それとも、三種の神器の事を知つている何者かがやつたのか……？』

ティアの眼つきが鋭くなる。

「気をつける。まだ用紙が温い。先程まで誰かが触れていた可能性がある。時刻は……深夜2時。子供が起きている時間じゃないな。やはり

死神か？」

ティアは左腕につけていた腕時計で今現在の時刻を確認する。

「ちょっとお兄ちゃん！ 脅かさないでよ！」

死神という言葉に、ウルは怯え、ティアの腕にしがみついた。ティアも敵がいる事を警戒したのか、ウルを自分の身体へさらに密着させた。

「まずはこの暗号が何を示しているのか解かないとな

ティアはコピー用紙とにらめっこを始めた。頭をフル回転させ、この数字が一体何を示しているのかを考える。ウルも少なからず書かれている数字に目を通し、答えを導き出そうとしているのだが、全く分からぬ。こういう謎々的なものは、ウルは得意ではないよ

うだ。だからと言って、ティアが得意と言うわけではない。すでに解き初めてから1分が経過していた。敵がすぐ近くにいるかもしれないという緊張感の中でこれを解くのは、かなり難しい事だろう。頭を謎々の方に集中させていると、後ろをとられていても気が付かない恐れがある。

「…………… そうか！ 分かったぞ！」

「え！ 分かったの！？ 何て意味なの！？」

ウルは謎々の答えをティアに求めた。

「つまり三種の神器の2つ目がある場所はあそこか……」

第2夜「三種の神器」（後書き）

誤字脱字があるかもしだれません。

オリキャラはまだ募集していますが、一度投稿した人はなるべく投稿を避けてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6238y/>

悪魔の妹ウル

2011年11月22日17時28分発行